

## 新たな人生の船出

明治大学大学院教養デザイン研究専攻  
銭 海英

桜が舞うこの時期に、これから新たな人生へと船出する決意をした。でも、そもそも「新たな人生」とは一体何を指すのか、これまで生きてきた自分自身と一体何が違うのか、この第一弾のエッセイを通じて発信する。

2022年度の渥美国際交流財団の奨学生として、本来であれば、この3月末に博士学位を取得するはずだった。同期の奨学生たちは、ほとんどの方々が4月から新しい進路でそれぞれの道を頑張っていく。ポストドクターに進んでいく方もいるし、助教職、常任教員職を得た方もいる。しかし、私は引き続き博論の完成に向けて頑張っていくのであり、何も変わらないように思える。「新たな人生の船出」とはよく使われる新年度のフレーズでしかないと思われるのではないだろうか。

前置きが長くなるばかりであるが、何はともあれ、私の心境を展開しつつ、お話を進めていきたい。

普段の私は、勉強以外では、運動することが好きで常に体力をつけることを意識している。コロナ禍でクロスバイクを買い、サイクリングを始めた。今では電車を使うこともほとんどなくなり、このエッセイも自転車で代々木公園に行き、花見客に混じって桜の下で書いている。

体力をつけることを意識するようになった理由は、研究者にとって最後の踏ん張り時には体力が大事だと教わったからである。しかし、昨年2月のある日突然、このようなアウトドア派の私にとって、予想外の病気が発覚した。

東京医科大学病院で乳がんのステージ2Bと診断された。乳腺科の主治医から「やっぱり癌（悪性）です」と腫瘍の病理診断（良性悪性を識別）を伝えられた際に、私は当時非常に冷静、そして理性的であったことを覚えている。当時冷静に主治医とこれからの治療方針について検討していくことができたのは、腫瘍の病理検査結果を待っている二週間で乳癌に関する医学知識を増やしたからである。

東京医科大学病院乳腺科の先生たちが書いた医療記事及び論文を確認したのはもちろん、日本国立がん研究センター、北京大学腫瘍医院、アメリカがん研究センターにもアクセスして乳がんの最新治療および臨床データも確認した。確認すればするほど、乳がんに対する恐怖も次第に減少してきたのである。「恐れとは無知からくるのだ」と、改めて確認できたことは意外な収穫だったかもしれない。

とはいえ、腫瘍の病理診断を待っている期間は心理的に最も辛かった。乳癌について調べれば調べるほど、「私は、ほぼ間違いなく癌なのだ」と確信を深めることは、苦痛でしかなかった。しかし同時に、「乳房の腫瘍は実は9割以上が良性だよ」という、気休めの声が自分に語りかけてくるのである。人生で

最も長く感じた二週間は、「やっぱり癌です」という診断結果で終わりを告げた。悪性ではない可能性が現実に覆された時、目が醒めた。癌に直面して、これからは主治医が提案する治療方針に納得した上で取り組むほかない。そうしてこそ、患者として合格に値する。

乳癌と診断されて以降の一年間で、私は「未受精卵の凍結」、「抗がん剤治療」、「手術」、「放射線治療」といった一連の癌の標準治療を受けてきた。その間一度も主治医に「私はあと何年ぐらい生きることができますか」と質問しなかった。なぜなら、癌治療には個人差があることを知っていたからだ。そのかわり、「先生、私のステージ及びサブタイプ分類から見れば、現在の臨床データから10年生存率ほどのぐらいですか」と確認した。「90%ですよ」と告げられた際、嬉しかった。この90%は、あくまでも平均値だが、自分は絶対にこの平均値以上だと思っている。

確かに、癌は厳密に言えば、治癒できない病気である。だから、医学では、治癒に近い寛解を持ち出した。例えば、5年生存率、もしくは10年生存率。10年生存率とは、10年しか生きられないという意味ではなく、10年以内に癌で死亡しなかったことを意味する。また、10年間で再発していないことも意味する。癌が10年経っても再発しない場合、再発する可能性は極めて低いということであり、ほぼ治癒に近いと理解してもいい。

話がすっかり癌の説明ばかりになってしまったが、私はただ癌の知識を皆に伝えたいのではない。話を元に戻そう。やはり三十代前半で自分の死を意識した衝撃は本当に大きいものである。「新たな人生の船出」とは、文字通り私にとってこれまでの人生とは違う人生を始めることだ。これまでとは異なり、より時間を大切に使うようになり、そして、自分は何を一番やりたいのかがより明確になった。

怖がらず、侮らず、乳癌とともに生きること。これからは、さらに大望を抱いて残りの人生を積極的に生き、自分のために尽力したい。